




俺の名前は、三橋誠司(みはし せいじ)。この春から■校生となり、それなりに楽しい生活を送っている。

○×学園は、偏差値も高めで評判も良かったため、俺が通っていた■学から進学する人間も多い。よって、友達がそこを受けるから自分も……という奴も結構いる。しかし、俺の年代の男子は例年に比べて、極めて高い確率でこの○×学園を受けた。

その理由は、■学時代に絶大な人気を誇った先輩がそこへ進学したからである。どうせ通うなら、1人でもカワイイ女の子がいる■校に入った方が楽しそうと考えるしまうのは、男としては仕方がないだろう。





かく言う俺もそんな不純な動機で〇×学園を目指し、多少バカな男達もこそつてその学園への進学を目指し、結果として例年より多くの同期が進学。

■学時代からのアドバンテージを活かして、あわよくばより親密に……その熱意が実を結んだのだ。

合格発表のときは、それこそ多くの仲間と合格の喜びを分かち合い、「憧れの先輩に話しかけようぜ」などと明るい未来について盛り上がったものだ。

しかし、現実是非情……なぜなら、その憧れの先輩は、とある人物と付き合い始めたからだ。しかも、その人は、俺もよく知る人物だった。



「おっ……誠司、あそこに清水先輩がいるぞ」

1時間目が終わり、移動教室だった俺と友達はその移動途中で、俺たちの憧れだった先輩を見つける。

名前を清水由美子(しみず ゆみこ)。俺たちが■学に入学したときには、既にその可愛さから有名となっており、他校からも先輩を見に来る奴がいたほどだった。

それから、時を経るごとに美しさを増していき、モデル事務所からのスカウトも受けたとかどうとか……

そんな先輩が歩けば、男子生徒の大半は彼女を目で追っていく。もちろん、俺たちも同じだ。



「ああ……清水先輩、美人だよなあ。目の保養になるわ」

「だよな……それにあのおっぱい！ ■学的时候はそうデカくもなかったのに、

■校に入ってからあれだぜ？ すげえ……ゆっさゆっさしてる」

「隣の夏川先輩もかなり美人だし、やっぱり類は友を呼ぶってやつかね」

そんな他愛ない馬鹿話をしつつ、先輩たちを眺めていると、清水先輩がこちらに気づいて手を振ってくる。




「先輩……おはようございませすー!」

俺たちはその行為に瞬時に反応する。有名な先輩が自分から後輩の、しかも男子生徒に手を振ってくるなど普通ならありえない。しかもその視線には若干の親しみが込められている。その視線が向かう先は……俺。なぜなら、俺は清水先輩の交際相手である三橋晃司(こうじ)……すなわち、兄貴の弟だから。

憧れの先輩と同じ校に入ったら、既にお付き合いをされていて、それがなんと自分の兄だった! 距離が縮まったことを喜ばいいのか、他人のものとなってしまうことを悲しめばいいのか。俺は、未だに混乱の中にいた。





誰もが認める美少女であり、自分が密かに好きだった相手。しかし、心の底では相手にされることはないだろうと諦めていた人が、ある日、急に家について挨拶をされる。そのときは本当に驚いた。そして、そのときの兄貴のどや顔が忘れられない。まあ……そういう態度をとりたくなるのもわからないではないが、腹が立った。

しかし、それだけ清水由美子という存在は、飛びぬけたものだと言える。そんな彼女が今は兄貴の恋人であり、その弟という身分の俺には、他の男子とは違うフランクな態度で接してくれるのだ。



そんな役得があったり、自宅で先輩としゃべる機会があったりすると、元々諦めていた高嶺の花であっただけに、この状況はかなりラッキーだと思えるようになった。

自分が告白したところで成功していたとは到底思えない。事実、玉砕した男も数えきれないほど多く、自分をそこに重ね合わせてしまう。

それなら、弟という身分を活かして、先輩と楽しく会話できた方がいい。

そうはいつでもあの美貌なので、オナニーのオカズにはさせてもらっているが

……

兄貴は、あの体を自由にしていると思うと、羨ましいという感情しか湧いてこない

俺もあのおっぱいでパイズリとかしてほしい。妄想の中では、何回もやってもらったが、リアルでそれを体験したい。  
無理だとわかっているとしても、どうしてもそんな淡い期待を抱いてしまう。



「あー……女神が去って行く……手を振ってもらえたからいいけど……」

「今日もキレイだったなあ清水先輩。誠司と一緒に行動じていて正解だった」

「他の男達が眺めるだけの中、俺たちだけが手を振ってもらえる優越感が気持ち良い。今日も二日頑張ろうぜ！」

「お前らなあ……」

そんな本音をぶつちやける友達に呆れながらも、その気持ちがあわかってしまうのが悲しかった。  
今日も清水先輩は家に来たりするのだろうか。もし、そうなら嬉しいのだが。



そして、その日の放課後。俺の願いが天に通じたのか、清水先輩との下校となった。

サ  
ラ  
ッ

「ごめんね、誠司くん。私は忙しいなら今日はいらついで、言ったんだけど……」

「いや、俺は全然いいっすよ。(むしろ、俺は先輩と下校できてラッキー!)」

あ  
ち♡

こうして一緒に下校しているのは訳があり、兄貴がバイトの都合で帰宅が遅れるため、先輩が俺の家に入ることができない。  
それなら、と兄貴が俺に家のカギを開けて、先輩を入れておけと命令がきたのだ。



普段なら、どんな命令であっても突っぱねてやる俺だが、先輩のこととなると話は別。なぜなら、兄貴が帰ってくるまで先輩を独り占めすることができるからだ。  
こんな役得を逃すことなんてできない。

「でも、友達と約束があつたんじゃ……」

「ああ……いいんです、いいんです。どうせゲーセン寄ったりするくらいで大した用事じゃないですし」

むち♡

ゲーセンはまた別の日でも行けるが、先輩とこうして接する機会はいっ訪れるかわからない。それを考えると、どちらを優先するかなど悩むまでもない。



「お友達には悪いことしちゃったけど、ありがとね」

+

「いえいえ……」

にこりと俺に向かって微笑んでくれる先輩。最高に可愛いんだが！  
友達を必死で巻いてきた甲斐があった。あいつら、俺が予定を変更するとめっちゃ  
くちや怪しんでくるようになったから困りものだ。  
それでも、俺はこれからも先輩との時間を死守する！

すっ  
ち♡



それにしても、間近で見ると本当にレベルが高い。テレビに出ているアイドル顔負けの可愛さに、グラビアとも肩を並べられるであろう巨乳。にもかかわらず、引つ込むところは引つ込んでおり、余計な肉がついていない。



そして、どうしても目がいつてしまうのが、歩く度に揺れる先輩のおっぱい。はちきれんばかりの大きさに、いつシャツのボタンがはじけ飛んでしまうかとドキドキワクワクしてしまう。いや正直に言うとな、今すぐにも飛んでほしい。

おっちゃん♡



「あ、そうだった……誠司くん、もうすぐ校最初のテストだよね？  
帰ってくるまでの間、私が勉強を見てあげよつか？」

晃司くんが

サニ

「え、いいんっすか？先輩に教えてもらえるなら、すっごくありがたいです  
けど……」

「うん、いいよっ。晃司くんもいつ帰ってくるかわからないし、それまでの間は  
やることもないしね」

すち♡



「先輩は自分の勉強はいいんですか?」

サテラ

「私、こう見えても学年トップを取ったこともあるのよ? だいじょうぶっ!」



少し誇らしげに胸をはる清水先輩。こうやってしゃべってみないと、先輩の  
新たな一面を見ることはかなわなかつただろう。

そして、学年トップをとる頭の良さもあるとは、天は二物を与えるどころでは  
ない。

あーっ♡

これで水泳部のエースでもあって、運動神経もいいのだから、本当に死角がない。



ただ、水泳のとき、その大きなおっぱいは邪魔にならないんだらうかと疑問に思ったが、それを言葉にするだけの勇氣はなかった。

サニエ

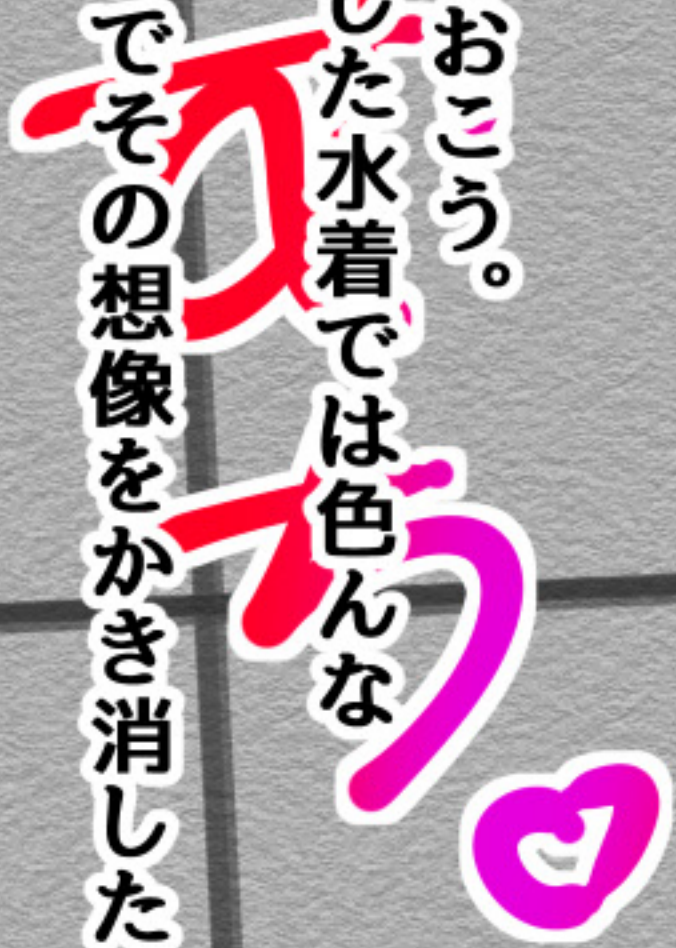


あと今度、どこかから水泳部の練習を覗けないか探しておこう。

先輩の競泳水着とかめちやくちや見たい！ ぴっちりした水着では色んなところが大変なことになっているに違いない。

想像しただけで俺の息子は立ち上がりそうになり、急いでその想像をかき消した。

今度のオナニーネタとして、とっておこう。





サ  
ラ  
ッ



それから、俺のテスト範囲をリサーチしつつ、自宅までも帰り道をのんびり歩いて帰った。

それだけでも幸せであったが、これからは先輩による個人レッスンがあるのだ。今日は最高にツイていると言っても過言ではない。

ひ  
ら  
ん  
び  
り  
♡



自宅に着いた俺は、先輩と自分用のお菓子と飲み物を用意する。  
それを一緒に手伝ってくれた先輩は、トレイで両手のふさがった俺を先導して  
くれるが、そのときにもまたラッキーに恵まれる。



っっっ

むち♡

むち♡

ダイニングの扉を開けてくれた先輩は、俺の部屋の扉を開けることも意識した  
のか、階段を先に上っていくのだが、それなりに勾配のある階段は下からパンチラ  
が見放題となってしまうのだ。  
もちろん、先輩も少しスカート裾を気にする素振りを見せるが、それで隠し  
通せるようなものではない。



そのため、先輩が一步階段を上がるごとに、プリプリした尻が動き、ピンクの下着がシワを作っていく。  
それを間近で見ることになった俺は、当然ち○ぽが勃起してしまう。



むち♡

むち♡

なんせ、学園のアイドルのパンチラだ。

学校外も含めると、一体どれだけの男がこの光景を見たいと思っているのか。それを今は独り占めである。

水泳で鍛えられているため、引き締まった尻と太もも。されど、柔らかさを失うことなく、女性らしさを保っている。

そして、先輩にピッタリといえる清楚さと可愛らしさを併せ持った下着が、とてもマッチしている。



さらに、今まで知らなかった事実……太ももの付け根にはホクロがあることが判明する。

「(エロ過ぎるっ！ あんなどころにもホクロがあるなんて、舐めたいッ！  
先輩のケツを揉みしだきながら、隠れているホクロを舐めたいぞおおお！)」



むち♡

できることなら、先輩のむっちりとした体を全て味わいたい！  
しかし、残念ながら、俺は先輩の恋人ではなく、その恋人の弟という立場だ。  
この立場を失うのはあまりにもつたないなので、襲い掛かりたい衝動をぐっと我慢し、今夜のオナネタとして先輩のパンチラをこの目に焼き付ける。



せめてスマホがあれば、映像や画像に残すことができるのに……  
齒がゆい思いをしながらも、俺の目は先輩のいやらしい股間を凝視する。



むち♡

むち♡

そのせいでち○ぽは、さらにガチガチとなっていくが、今はそれを気にしている  
場合ではない。  
この千載一遇のチャンスを逃すわけにはいかないのだ。



先輩の歩いたあとは、爽やかなシャンプーの香りが漂う。  
先輩の股間もこのシャンプーと同じように爽やかな香りなのだろうか。  
それとも、もっと甘い香りがするのだろうか。



むち♡

むち♡

っっっ

少し歩くスピードを上げるだけで、この魅惑的な股間に顔をうずめることができる……しかし、それをすれば事故で済まされるわけがない。  
じつとりとした暑さで先輩の股間も蒸れているだろう。  
嗅ぎたい……あの学園のアイドルの股間の蒸れた臭いを。もし、それが可能であれば、その行為だけで射精できると断言できる。  
嗅ぎたい……嗅ぎたい……しかし、我慢だ！ ムラムラが止まらない。



やがて、階段も頂上へと差し掛かり、このパンチラシーンも見納めとなる。  
なんで家の階段はこうも距離が短いのか。初めて自宅に不満を持った。



っっっ

むち♡

むち♡

しかし、これからも同じ手を使えば、先輩のパンチラを見れるかもしれない。  
先輩には悪い気もするが、このくらいの欲望は許してほしい。  
心の中で一応先輩に謝罪するが、その大半はこれから観察できる先輩の下着への  
ワクワク感でいっぱいになっていた。



その後、約束通り、先輩がテスト勉強を教えてくれることになったのだが、正直言うとう勉強どころではなかった。

おにや

なぜなら、先輩のあの豊満なおっぱいが左肩にのしかかっていたからだ!!





これまで彼女のいなかった俺は、当然その感触についても知識として知っているくらいで、本物を知る機会などなかった。そのおっぱいが図らずも俺の肩にのしかかっている。この状況で勉強に集中しろなどと言われても、到底無理だ。

おっぱい

しかも、その相手が学園一の美少女ともなれば尚更。

俺の意識の大半は左肩へと持っていていかれ、股間はギンギンにいきり立っている。それを隠すために、出来る限り体を机にくっつけているが、先輩にバレているのかどうかは分からない。

ギンギン



そんな二つの意味でのドキドキのせいで、勉強は凡ミスを連発する。  
すると、先輩がかささず指摘してくれるのだが……

「あっ……誠司くん、そこ間違ってるよ」

おにや

「あ……うっす」

耳元で囁くように指摘されると、それだけち○ぽが反応してしまう。





こんなことなら、学生服のまま勉強を行うべきだった。汗くさい服のままでは先輩に失礼だと思い、着替えさせてもらったのだが、ズボンの生地が柔らかいため、勃起すると大きくテントを張ってしまう。

おにやう

小さい頃から、ち○ぽのでかさには自信があったが、今はそのでかさが裏目に出ている。  
とにかく、一旦取り掛かっている問題を解き終えて、休憩を挟んでもらうしかない。



その際に、一度トイレに行って、シコろう。  
そうでもしないと、俺は先輩のおっぱいの感触と声だけでイってしまいそうだ。

「あ、また間違ってる……凡ミスに気を付けないと」

おにやう

「あー……すいません」

シコりたい。シコりたい。シコりたい。シコりたい。シコりたい。  
シコりたい。シコりたい。シコりたい。シコりたい。シコりたい。  
シコりたい。シコりたい。シコりたい。シコりたい。シコりたい。





そして、なんとか問題を解き終えた俺は、先輩にお菓子を薦めつつ、そそくさと自分の部屋をあとにした。

その後、急いでトイレに駆け込むと、俺は先輩のパンチラと笑顔とおっぱいの感触を思い出しながら、ち○ぽを扱いた。



また、

また

「清水先輩っ……………うん……………出るッ!!」



そのときのオナニーは、これまでで一番気持ちよく、精子の量も半端ではなかった。さらに、射精したばかりのち○ぽは、まだ勃起したままであったため、休憩の間に2回もオナニーをするはめとなった。



スツキリとした俺は、これで勉強に集中できると安堵したが、再度先輩のおっぱいを肩で感じたときには既に勃起していた。

おっぱい

イクイク

結局、兄貴が帰ってくるまでの間、俺は勃起したまま先輩の個人授業を受けることになった。  
先輩が帰ったあとは、また2回オナニーをした。そのときもやっぱり大量に精子をぶちまけることになった。



それから、先輩はテストまでの間、たびたび俺の勉強に付き合ってくれた。  
兄貴と付き合っているにもかかわらず、その時間を俺に割いてくれたのだ。  
優しく美人な先輩……

おにやう

俺はそんな先輩に感謝しながら、オナニーで先輩を汚す。  
悪いと思いつながら、その感覚にぞくぞくしてしまう。

そういうば、先輩と兄貴はどこでセックスしているのか……家ではセックスして  
いるような雰囲気もないのだが、やはりラブホだろうか？

こんな美少女とセックスできるなんて、本当に羨ましいと思う。





テスト勉強とオナニーを繰り返していると、いつの間にかテスト期間へと突入していた。

しかし、先輩の教え方も上手かったため、俺は難なくテストをクリアし、あとは得意科目を残すだけとなる。

その帰り道。途中から急に降りだした大雨によって、ずぶ濡れになってしまった俺は、家に帰るなりすぐに風呂場へと向かう。

ここまで調子良くきていただけに、こんなところで体調を崩すわけにはいかない。何より、勉強を教えてくれた先輩のためにも良い成績を残したかった。





「タオル、タオル……と？」

ガ  
ン  
ッ

「あ……」

む  
ち

プ  
レ  
ン

ニ  
ル

ここは我が家だ。しかも、テスト期間ということで、昼間に帰宅したので家にいるとしたら、兄貴ぐらいしかいない。そのため、いつもの癖でノックもせず、脱衣場の扉を開けた。  
すると、そこにいたのは兄貴ではなく、清水先輩だった。